巻頭言

レジェンドへの嫉妬

椎木 弘

Jealousy for the Legends

Welcome to the 63rd Annual Meeting of the Polarographic Society in Shimonoseki

Hiroshi Shiigi

下関は三方が海に開かれ、関門海峡、山陰海岸に面する風光明媚な街である。古くよりアジア大陸への玄関口として栄え、壇ノ浦の戦い、下関戦争や日清講和条約など、しばしば日本の歴史を大きく変えた転換の舞台でもあり、けっして都会とはいえないが大きなエネルギーを感じる魅力的な街である。ポーラログラフというエポックメイキングな発明に端を発し、大きくはないがエネルギー感本会の性質に通じるものを感じ、第 63 回ポーラログラフーおよび電気分析化学討論会を下関で開催させていただくことにした。

宮古島にて討論会理事を仰せつかつて以来、開催地と討論主題について「ポーラログラフーおよび電気分析化学討論会」60 回のあゆみ (*Rev. Polarogr.*, **60**, 177-179(2014)) を眺め思案する日々が続いた。1954 年の第 1 回から変遷を辿り、60 回までのあゆみと最近の会告をならべてみれば、63 回に求められるものが自然と導かれると考えた。これは本討論会の伝統に傷をつけることなく、無事、次回にバトンを渡す無難な道を探す傾向と対策であった。昔を知らない私にとって討論主題や開催地などから本会を取り巻く環境の緩やかな変化を窺い知ることができる重要な資料となった。しかしながら、近年の開催記録のところでその傾向は急激に変わり、対策を講じることができな

いま年末を迎えた。

年末といえば、十大ニュースや流行語大賞、紅白歌合戦などメディアが賑わう。紅白歌合戦は 1951 年に第 1 回紅白音楽合戦としてはじまり、今年で 68 回を数える伝統的番組である。話題の人やスターがその年の締めくくりにふさわしく華やかにステージを彩る。大トリを飾る大御所の歌声は自分が日本人であることをしみじみと感じさせる。

歌声の良し悪しに関わらず大御所は何処のコミュニティにも存在する。いつもそこに在り、コミュニティに大きく貢献し、絶大な影響力を持つ。スターは分野をまたいで輝く星である。スターや大御所は圧倒的に秀でた才能や人格、功績などに基いて与えられる呼称であり、私とは別世界の人物である。一方、最近気になるのはレジェンドと形容される人物像である。**legend** は伝説、伝説的人物の意であるから、最高級の形容である。数年前、スキージャンプの葛西選手が初めてそう呼ばれたと記憶している。レジェンドはスポーツ界などで既に引退の年齢であるにもかかわらず第一級の活躍を続けている人物の意であるから、イチロー選手もレジェンドにふさわしい。葛西選手やイチロー選手とほぼ同年である私にとって、彼らの活躍を見聞きするたび感激し、刺激される。その一方で、彼らが独自の挑戦の場を見出し、挑戦し続

けていることを羨ましく思う。メディアを通じた情報に基づく主観ではあるが、相対的な評価よりも自身が如何に挑戦するかに重要性を見出し、挑戦することを楽しんでいるように思えるからである。

日々の地道な研究が実を結び、やがて学会や論文発表により日の目を見る。研究者が満足するといったほどの意味で自然への挑戦に成功した結果がさほど有益でない場合もあるし、失敗が重要な示唆を与えることもある。いずれにせよ、研究者は挑戦を止めない。独自の場で持続的に挑戦し、楽しむことのできる研究者は、年齢問わずレジェンドと呼ぶにふさわしい。独自のアイデアや工夫に基づいたそれらの挑戦は新鮮で刺激的であり、学会や論文でのプレゼンテーションは武骨で色気のない表現であっても力強く魅力的である。本討論会の名物である刺激的な発表と白熱した議論は、そうした挑戦によって自然と築かれ受け継がれてきた良き伝統である。

持続的な挑戦はレジェンドを生み、伝統を築く。第1回から62回までの討論会は多くのレジェンドたちの挑戦によって支えられてきたことを考えると、63、64回、そして100、200回と世紀を超えて受け継ぐためには、それに見合う挑戦が必要である。そうした意味で不変的ではあるが改めて「電気分析化学の挑戦」を第63回討論会の主題とさせていただいた。

近年、研究を取り巻く環境が急激に変化し、成果主義を成果正義と見間違えるかの如く感じられる。自身を振り返ると、そのような風潮にうんざりしながらも、いつの頃からか相対的な評価が気になり、見栄え良く、比較的達成が容易な課題の選定に必死になってしまったように思う。そうなるも課題を克服したところで、一定の安心感は得られるものの楽しくはな

い。満足のいく自己満足すらできなくなった自身と決別し、独自の挑戦の場を見出すことからはじめよう。主題には、そうした個人の決意も含んでいる。そういう流れであるから、開催候補地の選定についても、無難な選択は決意に反する。

年が明け、今年初の挑戦として日本地図を開くことからはじめた。開催候補地を選ぶ作業は飛距離を争う競技ではないが、離島を意識せずにはいられなかった。レジェンドたちは私には飛べない距離を軽々と飛んでしまっており、とても敵わないと早速弱気になってしまったが、自身が如何に挑戦するかが重要であると思い起こし、改めて日本地図を眺めた。関西から東に行くか、西に行くか悩んだが、数年以上帰省していない周南市（山口県東部）の実家に今年の正月も帰省しなかったことを詫げる思いで、西へ進むことにした。高いジャンプ台に登り、関西を起点として飛んだジャンプは意外にも大滑空となり、K点（Kisei point）を100 km以上超えて無事着地した。

レジェンドたちと下関でお会いできることを楽しみにしている。会場である海峡メッセや隣接の海峡ゆめタワーから、心ゆくまで関門海峡の豊かな風景を楽しんでいただきたい。なお、ジャンプが足りない方は、下関港から連絡船を利用して少し離れた巖流島（船島）に渡ることができるのでぜひ（片道400円、10分）。

最後になりましたが、受賞講演を含め国内外より90件（8月25日現在）もの講演申込をいただき、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

そして僭越ながら、

おいでませ山口へ

（しいぎ ひろし 本会討論会理事）